

忘れることは、解決ではない

長野県 屋代高等学校附属中学校

三年 山田 陽菜乃

知らなかった、のではなくて、“知ろうとしていなかった”。

アニメ「めぐみ」を見て、私は痛感した。ニュースやドキュメンタリーなどでよく目にする拉致問題であるが、過去の私を省みると如何に私がこの問題を他人事のように、薄く見ていたかが分かった。拉致問題について知っていたつもりだがあくまでそれは“つもり”であって、私は本当にしっかりとこの問題について考えたことは無かったのだ。

私にできることは何だろうかと考えてみた時、すぐには思い浮かばなかった。まだ中学生、一介の中三にすぎない私に、できることなどあるのだろうか、と。考えてはみたが、具体的なことは何も思いつかなかった。しかし、このように何かこの拉致問題について知り、理解を深めることは私にできることなのではないかと思う。一人の日本人として、——拉致被害者の方々と同じ日本人として、拉致問題を知り、きちんと問題として捉えることはひとつの責任ではないだろうか。

このようなことを考えた中で、ブルーリボン運動という拉致被害者の帰国の実現を目指す運動を知った。青いリボンの意味は海、そして青い空——同じ空の下、というものだ。アニメ「めぐみ」で横田さん夫妻が拉致被害者の帰国を求めているシーンが強く印象に残っているが、先日報道番組で、実際に横田さん夫人が拉致被害者の家族などの大集会で話しているのを見た。「私たちはただ、『頑張ったね』と声をかけてやるその一刻だけが欲しいのです」。胸には青いリボンが輝いていた。

今まで流すように見聞きしてきた拉致問題だったが、今回のように何か学んだ状態で聞くと今までとはわけが違った。これは知っておかねばならない、そして理解しなくてはならない。そう切に思う。

ちっぽけな私に、実際に拉致被害者の方々のためにできることはそう無い。私は政府の間でも、拉致被害者の家族でもない。しかし、知って理解することはできる。過去の悲劇に背を向けず、真正面から受けとめ、そしてそれをきちんと重要視し、捉える。私にできることはこのぐらいだが、これは忘れ去られてはいけない問題だ。横田めぐみさんを始め、多くの拉致被害者の方々の一刻も早い帰国を目指し活動する方々に賛同し、協力できることをするのが、基本的人権の下自由を掲げる国の国民の責任とすべきことなのではないだろうか。時が経ち、忘れ去られたとしても、帰国の無い限りそれは解決とはならない、と私は深く思う。忘れることは、解決にはならないのだ。